

句集
春蘭


鬼頭桐葉

鬼頭桐葉

春 蘭

桑解きて雪の御嶽見てゐたり

萍の生ひ初む中に神の山

うなる髪うなづくばかり雛あられ

笑ひ初めたる里山の水の音

牡丹の芽に一とひらの雪がのり

春の川大きな月の出てゐたる

山鳥の歩いて消ゆる杉の中

春蘭や足音に耳澄ましをり

春障子ますほの小貝出して見る

鰐口のきこえてきたる田螺かな

竹藪のどこをどうして藤の花

草餅に指紋採られてしまひけり

春の闇猫は隠れたつもりなり

轉りや外出せぬ靴翔んでゆけ

つちのこの棲むと云ひけり春の雪

蝶々を神隠しするさくらかな

合点と墓の隠れてしまひけり

尺蠖の進みゆく方頭かな

夕刊の半分濡れし梅もどき

種茄子そのまま忘れ茄子かな

鼻緒やや締め気味なりふくさ藁

ぐんぐんと沖へ泳いで手を振れり

初秋の影ある七となつてをり

月明の水や泡立つ杭ありぬ

夢殿を覗く額のひやひやす

小春日の鏡に川の流れをり

今朝の冬水なき橋を渡りけり

昨夜の雨拂ひて齒朶を刈りにけり

どの径を行つても着くよ木守柿

風花や風呂敷包みはらふ門

敷藁を鶏がついばむ梅林

紅梅の明りとおもふ絵馬の堂

病院に紅梅一枝持ちちゆけり

立居して盆梅の香の乱れける

春遅々と琴柱倒るるひびきかな

雛の夜の生姜湯のみて眠るかな

灯を消してひひなの瞳おもひをり

湖の水さしこむ洞の花芥

古書展のところどころに櫻草

霞む日や茶屋の笥に水あふれ

鉄棒を一回転すさくらかな

春暁のカーテンの襞深しとも

夕凧の真珠筏を漕ぎて去る

風鈴のテロとも鳴らぬ束ね髪

だんだらの日の射す桶に心太

打水のゆきとどきたる鱧料理

湯上りの人が隣に大文字

川風は潮の匂ひの大やんま

手から手へ子は眠りゐて天の川

ちつち蝉昏れゆく湖に帆が一つ

著者略歴

鬼頭桐葉（きとう・とうよう）本名（政子）

大正10年4月23日 三重県に生る

岡井省二先生に師事

平成3年7月 「槐」同人

句集 しゅんらん
春 蘭

2000年1月30日 発行

著者 鬼頭 桐葉

発行人 本阿弥 秀雄

発行所 本阿弥書店

B 6 変形 二句組

PDF 製作 俳誌のサロン